

自己評価報告書

平成23年4月20日現在

機関番号：32682
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008～2012
 課題番号：20530533
 研究課題名（和文） 被虐待児の養育支援における包括的心理コンサルテーションシステムの開発
 研究課題名（英文） Development of the Comprehensive Psychological Consultation System for Parenting Support Maltreated Children
 研究代表者
 加藤 尚子（KATO SHOKO）
 明治大学・文学部・准教授
 研究者番号：00307977

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：心理コンサルテーション，児童虐待，児童養護施設，養育

1. 研究計画の概要

本研究は、被虐待児の養育支援を行う児童養護施設における包括的心理コンサルテーションシステムの開発を目的とする。まずは、心的外傷からの回復と愛着関係の再形成という視点から、施設における被虐待児への心理支援の流れについて検討を加え、支援プロセスを明らかにする。

次いで、これまでの研究において把握された心理コンサルテーションの具体的方法について、機能的側面からさらなる検討を加える。心理コンサルテーション介入の方法としては、個人、事例、課題、システムコンサルテーションなどがあり、それぞれが果たす主要機能に違いがあることが指摘されている。具体的には、昨年度助成を受けて研究者が開発した「心理コンサルテーションの機能測定尺度」を用いるとともに、施設職員に対して詳細な聞き取りを行うことで、機能の把握を行う。

以上、被虐待児への心理支援プロセスと、心理コンサルテーションの各介入方法における機能を把握した上で、被虐待児の心理支援プロセスに沿った心理コンサルテーション介入を検討するものである。

2. 研究の進捗状況

2008年度は、①職員支援という観点からの心理コンサルテーション機能の明確化、②児童養護施設職員の職務上の「支え」と「困難」に関する分析を行った。①について、本研究のために作成した『心理コンサルテーション機能測定尺度』とバーンアウト尺度との比較検討を行った結果、心理コンサルテーションにおいて「組織との関係調整」の視点を持つことが職員のバーンアウトリスクを

減ずるのに有効であることが明らかとなった。また、児童養護施設職員には、介護職などと同様に、バーンアウト尺度における「個人的達成感」因子が優位に低い結果が得られた。②については、自由記述欄の質的分析を行った結果、支えとしては「子どもとの肯定的な交流」、困難としては「職員・組織関係の不調」が中心的な要因であることが示唆された。2009年度については、育児休業により、比較検討群としての保育所等における『心理コンサルテーション機能測定尺度』データの収集のみにとどまった。（研究休止申請済み。）本年度は、(1)心理コンサルテーションの機能的側面の検討、(2)被虐待児の心理支援プロセスと心理コンサルテーションの日米比較に関する検討を行った。施設養育におけるコンサルテーション機能をより明確にするため、保育所等に対しコンサルテーション介入を行い、同質問紙による調査を行った。結果については、現在集計中であるが、入所型の施設養育と通所型の養育(保育)における差異を検討することで、施設養育における養育の特徴が明らかになることを想定している。被虐待児の心理支援プロセスと心理コンサルテーションの日米比較のため、米国 Massachusetts にある Trauma Center に調査に行き、トラウマの観点からの被虐待児のケアと施設介入プログラムに関するヒアリングを行った。Trauma Center における子ども時代の複合的トラウマへの ARC-Model（愛着・自己制御・能力モデル）から、被虐待児への支援における重層的・システムのケアの重要性と養育者のケアとサポートの重要性が示唆された。保護システムとしての養育者組織づくり、養育者の感情管理、Attunement や Consistent Response 等の養

育者組織づくり，養育者の感情管理，Attunement や Consistent Response 等の養育のスキル獲得に着目した，心理コンサルテーションシステムと介入方法の必要性が示唆された。

3. 現在までの達成度

心理コンサルテーションの機能を把握するために，

(1) 『心理コンサルテーション機能測定尺度』の作成

(2) 児童養護施設における心理コンサルテーション機能の明確化

(3) 通所型養育施設（保育所）における『心理コンサルテーション機能測定尺度』データ収集を行った。

次に，心的外傷からの回復と愛着関係の再形成という視点からの施設における被虐待児への心理支援プロセスの明確化のために，

(4) 児童養護施設職員の困難と支えに関する要因の抽出

(5) 米国における心的外傷・愛着形成の観点からの施設心理支援モデルに関する調査

(6) 児童養護施設職員への心理支援プロセスに関するヒアリング調査を行った。

本研究の目的である，包括的心理コンサルテーションシステムを検討するための基礎的調査が概ね完了したものと考えている。

4. 今後の研究の推進方策

心的外傷からの回復と愛着関係の再形成という視点からの施設における被虐待児への心理支援プロセスについて，(6) 児童養護施設職員への心理支援プロセスに関するヒアリング調査の分析を行い，その結果を対称軸としての ARC-Model（愛着・自己制御・能力モデル）にと比較検討する。

また，心理コンサルテーションの機能的側面に関する検討として，(1) 「心理コンサルテーション機能測定尺度」により，(3) 通所型養育施設（保育所）における『心理コンサルテーション機能測定尺度』の分析を行い，

(2) 児童養護施設における心理コンサルテーション機能との比較検討を行う。

以上をふまえ，被虐待児の心理支援プロセスに沿った包括的心理コンサルテーション介入を検討し，そのモデルを構築する。その仮説的介入システムに関し，研究協力施設にフィードバックし，意見を聴取した上で再検討を行い，実際の介入実践を行う予定である。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

加藤尚子「親に放任されている子」『児童心理』金子書房

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計1件）

加藤尚子「新人職員の迷い」『対人援助のためのグループワーク』，誠信書房，福山清蔵編著

育のスキル獲得に着目した，心理コンサルテーションシステムと介入方法の必要性が示唆された。